

てよい。こうした既存のシステムを、第6節で挙げた原則に従って就労支援に向けて機能的な仕組みに作り変えることは、社会に大きな便益をもたらすことになる。現時点で、全国をカバーするのは行政の仕組みしかなく、行政のイニシアティブが重要となる。

筆者の在住する静岡県では、県商工労働部雇用推進室のイニシアティブの下、静岡県中小企業団体中央会が受け皿となり、無業者に就労体験先を全県的に提供する取組みが今年度から始められる。就労体験先の企業に対して就労支援のノウハウを提供し、かつ、個々の対象者に対して継続的な支援を提供するのは、筆者が代表を勤めるNPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡である（将来的には、就労支援のノウハウ自体を雇用側に移転し、NPO法人なくしても、無業者を社会に吸い上げる仕組みができることを目指している）。このように、対象者を雇用の場に直接つなげて側面的な支援を提供するという仕組みは、発達障害者に対する支援の主要形態であるジョブコーチと同一である。社会性の訓練の場は社会（＝雇用の場）である。静岡県では、このシンプルな原則に基づき、行政が、無業者を雇用の場へと直接つなぐ、就労支援の仕組みが試みられようとしている。

静岡県におけるこの取組みは、行政と経済団体が連携し、それを側面からNPOが支えるというものだが、無業者というスケールの大きな問題を解くための仕掛けとして、注目してよいのではないだろうか。

第8節 最後に

なぜ、同じ環境において、ある人は無業者になり、ある人は無業者にならないのだろうか。無業者の就労支援は個別支援であるから、この問いに答えずして、的確な援助をすることはできない。

そもそも、仕事に就かなくてはと頭で分かっている、実際には動き出せないというのは、自分の情動（不安など）が統制できないため、理性的な行動が取れない状態であると考えられる。このような状態を理解するには、脳科学や発達心理学の知見が有効である（Rothbart, MK and Jones, L,B, 1998 ; OECD 教育研究革新センター, 2005）。さて、これらの学問は、

- ・内向的な子どもは恐れと罰によって動機付けられる（が、外向的な子どもはプラスの報酬によって動機付けられる）
- ・内向的な恐れの高い子どもは、不安から逃れるため課題から逃避的な対応をしがちで、他者から見られていたり評価されていたりすると、難しい課題への興味を失って、行動も消極的になりがちであることなど、人間が持っている気質の差が、環境への反応を規定していることを明らかにしている。こうした知見は、無業者へのなりやすさが、就労年齢になって始めて現れる特性ではなく、その人の生得的な気質を反映していることを示唆しているから、無業者を単に怠け者だといって責めることは筋違いである。

動き出しにくい無業者を支援するには、新しいことにチャレンジしようという達成動機を高めることが必要である。脳科学や発達心理学は、恐れの高い子どもの達成動機を高めるには、

- ・新しい情報や場面に導入する際には徐々に行い、安心感を与える
- ・やる気を失いやすいので、本人の成果に対して正確なフィードバックを頻繁に与える

- ・成果だけではなく努力自体もほめる
- ・成功場面において報酬を与える（罰を与えない）
- ・自分を脅かすような場面刺激や内的な無能感ではなく、内外のプラスの側面に注意を向けさせ、自己有効感と成功感を高める
- ・小集団において他者とかわる機会を与えて、社会的場面における自信を付けさせ、自己評価を上げる

ことなどが大切であることを示している。

無業者に関するこれまでの研究の多くは社会要因を重視してきた⁸が、就労支援に当たっては、個人が本来持っている生得的な特性を理解し、それに合った援助を行うことの方が早道であるように思われる。脳科学や発達心理学の知見は、具体的な方向性を指し示しているが、今回調査を行った就労支援機関の活動から読み取られた、就労支援の原則もまた、これらの知見と基本的には一致している。

本稿が、真に、個人の理解に立脚した就労支援サービスの提案の一步となることを期待している。

⁸ 現在の社会科学が環境要因の影響を過大視している点については、ピンカー（2004a; b; c）の指摘に耳を傾けたい

謝辞

事前の聞き取りに協力していただいた、ちば若者キャリアセンター、東京保護観察所（保護司）、東京障害者職業センター多摩支所、青少年就労支援「育て上げ」ネット、社会福祉法人横浜やまびこの里・仲町台センター、静岡県地域労使就職支援機構、静岡障害者職業センター、静岡県立静岡北養護学校、杉山兼男商店（通院患者リハビリテーション事業・職親）、静岡中東遠障害者就業・生活支援センター、ヤングジョブスポット京都、情報センターISIS、特定非営利活動法人ひろしま新生雇用サポートセンター、広島市教育委員会青少年育成部、NPO ひろしま青少年倶楽部、また、いろいろな御教示をいただいた全国LD（学習障害）親の会に感謝いたします。

参考文献

- Rothbart, M. K. and Jones, L. B. (1998) 「Temperament, self-regulation, and education. *School Psychology Review*」 27(4): 479-91.
- OECD 教育研究革新センター (2005) 「脳を育む 学習と教育の科学」 明石書店
- 梅永雄二 (2002) 『LD(学習障害)の人の就労ハンドブック』 エンパワメント研究所
- (2004) 『こんなサポートがあれば!』 エンパワメント研究所
- 小川浩 (2001) 『重度障害者の就労支援のためのジョブコーチ入門』 エンパワメント研究所
- 小川浩・志賀利一・梅永雄二・藤村出 (2000) 『重度障害者の就労支援のためのジョブコーチ実践マニュアル』 エンパワメント研究所
- 衆議院内閣委員会 (2004) 議事録第8号 (平成16年11月24日 (水曜日))
- 津富宏 (2004) 「仕事に就きたい、続けたい若者を支援する」 月刊少年育成 578: 34-39
- in press 「若年無業者の就労支援をどうするか」 青少年問題
- ピンカー, スティーブン (2004a) 『人間の本性を考える[上]』 日本放送出版協会
- (2004b) 『人間の本性を考える[中]』 日本放送出版協会
- (2004c) 『人間の本性を考える[下]』 日本放送出版協会
- 本田由紀 (2005) 「「対人能力格差」がニートを生む」 中央公論 2005(4): 82-91
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会』 筑摩書房